

令和6年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 木屋瀬 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和6年4月18日（木）に、「教科（国語、算数）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月10日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査（国語、算数）

教科に関する調査（国語、算数）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査

- 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査（国語、算数）の結果

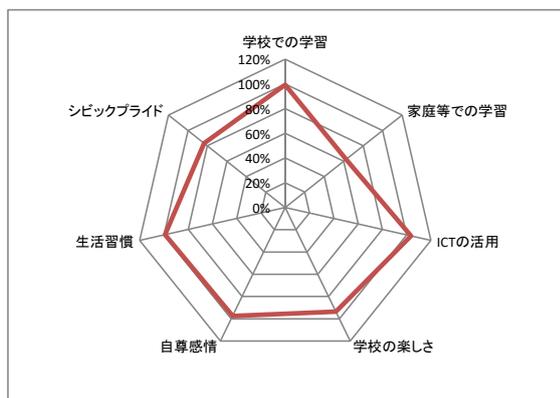
| 本年度の結果 | 国語 | | 算数 | |
|--------|-------|-------|-------|-------|
| | 平均正答数 | 平均正答率 | 平均正答数 | 平均正答率 |
| 本市 | 9.3 | 66 | 9.6 | 60 |
| 全国 | 9.5 | 68 | 10.1 | 63 |

(2) 本校の学力調査結果の分析

| | | | |
|----|-------------|--|-----------------------|
| 国語 | 全体的な傾向や特徴など | 全体的に見ると、概ね全国平均と同じであった。「知識・技能」では、情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと、「思考・判断・表現」では、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができている。書くこと・読むことは、全国よりやや上回っているが、話すこと・聞くことは、全国より下回っており課題である。 | 全国平均正答率との比較 下回っている |
| | よくできた問題 | 事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する問題（記述式） | |
| | 努力が必要な問題 | 資料を活用するなどして、話すときに自分の考えが伝わるように表現を工夫する問題 | |

| | | | |
|----|-------------|---|-----------------------|
| 算数 | 全体的な傾向や特徴など | 全体的に見ると、全国平均よりもかなり下回っており、基礎基本の定着や問題を読み取ることに課題がある。特に、「変化と関係」の領域では、速さなど単位量当たりの大きさの意味及び表し方について理解し、それを求めることに課題がある。また「データの活用」では、円グラフの特徴とそれらの用い方を理解することや、データの特徴や傾向に着目し、問題を解決するために適切なグラフを選択して判断し、その結論について多面的に捉え考察することに課題がある。 | 全国平均正答率との比較 下回っている |
| | よくできた問題 | 数量の関係を、口を用いた式に表すことができるかどうかをみる問題。 | |
| | 努力が必要な問題 | 「変化と関係」「データの活用」に関する領域の問題 | |

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



| 質問調査の結果分析 |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができる子どもは、約85%と多い。本校では、ユニバーサルデザインによる授業を通して、児童の学ぶ意欲を高め、「わかった、できた、もっと」を感じる授業づくりを行っている。これからも、取組を続け、学習への意欲を高めていくようにする。 授業中のICTの活用は週3回以上している子どもは約70%、週1回以上になるとほとんどの児童が活用していると回答した。しかし、家庭になるとICTの活用は約15%となり、家庭でも活用していくことができるような声かけをしていく。 家庭学習を1時間以上する児童は約30%と、家庭での学習があまり定着していない。また、ゲームやSNS、動画視聴を1日3時間以上している児童が約40%いる。 友達関係に満足していると回答した児童は90%近くおり、学校での楽しさを感じることができている。また、先生がよいところを認めてくれていると思うと回答した児童は約95%であり、自尊感情が高い児童が多い。 生活習慣では、早寝、早起き、朝食の摂取ができている児童が多い。 シビックプライドでは、地域や社会をよくするために何かしてみたいと回答した児童は約70%いた。 |

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

- ・児童主体の学習や、話し合いを中心に個人と他者の考えを練ることを大切にする授業形態は今後も継続していく。
- ・学力や学習状況の分析を更に行い、課題をピンポイントで明らかにして指導の改善や補充につなげていく。
- ・授業のユニバーサルデザイン（UDL）による、どの子もわかる授業づくりを推進する。

② 家庭生活習慣等に関する取組

- ・自学ノートコンテストの実施など、自学を中心としながら家庭学習が習慣化するように家庭と連携を図る。
- ・ゲームの時間や、携帯やタブレットを見る時間が多い事実を保護者に伝え、改善の協力を求める。